

第八章

ウォレス氏——人口から生じる困難は遠い将来の問題だとする誤り——コンドルセ氏による人間精神の進歩の素描——コンドルセ氏のいう「変動」を人類に適用すべき時期

先に示した明白な結論に立てば、人間と社会の完全化を唱える論者が、人口過剰に言及してもそれを軽視し、その困難を想像もつかないほど遠い将来の出来事のように語ってきたのは驚くべきことだ。ウォレス氏でさえ、人口過剰の問題が自身の平等論全体を揺るがしかねない重みをもつと認めながら、地球の隅々までが庭園のように耕され、生産の増加が頭打ちになる時期に至るまでは、この原因による困難は生じないかのように考えていたふしがある。もしそれが本当で、しかも他の点では美しい平等の制度が実行可能なら、はるか先の困難を理由にその構想を追求する熱意を弱める必要はないし、そこまで先のことは成り行きに任せればよい。だが本書の見方が正しければ、その困難は遠いどころか切迫した目前の課題である。今このときから地球が庭園のようになるまで、

耕作の進展がいかなる段階にあつても、人々が平等であるかぎり、食料不足の苦難は常に人類全体を圧迫し続ける。たとえ地球の産出量が年々増えようとも、人口はそれをはるかに上回る速さで増大し、その超過分は定期的あるいは絶え間なく作用する不幸や悪徳によって必然的に抑え込まれる。

コンドルセ氏の『人間精神進歩史』は、のちに彼を死へと追いやる苛烈な弾圧と冷酷な追放のただ中で執筆されたとされる。生前の公表はほぼ不可能で、フランスの世論や社会の支持も望めなかった以上、日々の現実が致命的な否定と矛盾を突きつけるなかでも自らの原理に固執し続けたという点で、きわめて稀有な例である。世界有数の啓蒙国家にあつて、長い歴史の積み重ねにもかかわらず、恐怖、残虐、悪意、報復や復讐、野心、狂気、愚行といった情念が噴出し、人間の精神を最も野蛮な時代の未開の民族ですら恥じるほどに貶めたという現実、精神は必ず進歩するという確信、そしてその進歩は必要にして不可避だという観念に、甚大かつ決定的な痛打を与えたはずだ。にもかかわらず、外見上の状況や証拠に反してなお自らの原理の正しさを疑わない強固な確信だけが彼を支え、その衝撃に耐える拠りどころとなつたのだろう。

没後刊行となつたこの遺作は、著者が本来構想したはるかに大規模な計画の素描にす

ぎない。そのため、理論の正当性を裏づける詳細かつ具体的な検討や、現実への実証的な適用を欠いている。もし想像にとどめず現実に当てはめてみれば、わずかな観察や指摘だけで、この理論は全面的な矛盾を露呈し、完全に否定されることが明らかになる。

同書の最終部で完全化への進歩を論じるにあたって、著者は欧州の文明諸国について、人口と領土を対照し、耕作の程度や産業の実情、分業の発達、そして生計の手段を見渡す。その結果、欲求を満たす手段を自らの労働以外に持たない人びとが一定数いなければ、同等の生活水準も人口規模も維持できないと述べる。この階層の不可欠性を認めたうえで、家長の生命や健康ひとつで家計が全面的に左右される世帯の収入がいかに不安定かを示し、「ここに、われわれの社会で最も多数で活動的な階層を絶えず脅かす、不平等と依存、さらには困窮の必然的原因が存在する」と正しく指摘する。〔紙幅の都合により、ここではコンドルセ氏の見解の骨子のみを述べる。趣旨を損なわないよう努めるが、詳しくは原著を参照してほしい。〕問題提起は的確だが、示された解決策には効果が乏しいおそれがある。寿命の確率と利子計算にもとづく基金を設け、高齢者には本人の従前の貯蓄と、給付前に死亡した抛出者の、貯蓄の一部を原資とする扶助を保証するという。同様の基金で寡婦や孤児を援助し、新たに家族を築く年齢層には事業を適切

に當むのに足る資本を与えるとも提案する。これらの制度は、社会の名においてその保護のもとに設けうるとし、さらに、公正な計算を適用して信用を富裕層の特権とせず、すべてに等しく堅固な基盤を与え、産業の進歩と商業の活力を大資本家への依存から切り離すことで、平等をいつそう確かな形で維持できるとも述べる。

この種の制度設計や試算は、紙の上ではもっともらしく見えても、実際に運用しても効果は上がらない。コンドルセ氏も、産業に従事し自立して暮らす層はどの国にも不可欠だと認める。その理由は、人口が増える社会では、生計を支える不可欠の労働は、必要に迫られてこそ担われると考えるからである。もし制度が勤労意欲をそぎ、怠惰な人たちが信用や将来の家族扶助をあてにして、意欲的で勤勉な人たちと同等に扱われるなら、公共の繁栄を支える自助の活力は保てない。さらに、申請を審査し、本人が最善を尽くしたかどうかで支援の可否を裁断する機関を設ければ、英国の救貧法を拡張したのと同じことになり、自由と平等の原則を損なう。

とはいえ、制度に対する重大な異議や欠陥、反対理由をひとまず脇に置き、生産活動や各部門の生産的労働が当面は損なわれないと仮定しても、最も深刻な問題は依然未解決で、さらに大きな困難も残ったままだ。

だれもが家族の暮らしにゆとりある備えを整え、すなわち家族を養うに足る安定と十分な保障があると確信できるなら、多くの人は家庭をもちたいと考えるだろう。さらに、新しい世代が悲惨という霜にさらされず、その致命的で凍てつくような、命をも脅かす影響を免れていれば、人口はたちまち増勢に転じるはずだ。この点はコンドルセ氏も認めており、さらなる改良と進歩に言及したのち、同様の見解を示している。

労働と産業が発展し繁栄が広がれば、各世代はより多くの恩恵を受け、人口は自然に増加する。やがて、人口の動きと生活手段に関わる基本的な二つの法則がせめぎ合う局面に至るだろう。人口の伸びが生活資源の増加を上回ると、幸福と人口が持続的に後退するか、改善と悪化のあいだを往復するような変動に陥りかねない。この段階に達した社会では、その変動が周期的な困窮を生む恒常的な要因となりうる。結果として、これ以上の改善が難しくなる限界が見えてきて、人類の向上は長い歲月や幾世代を経て到達し得ても、それを越えることはできない到達点があることが明らかになる。

彼はさらに付け加え、次のように結んでいる。

そうした時代が私たちから見て極めて遠いのは明らかだとして、はたして到達し得るのか。人類が現段階ではほとんど想像もつかない水準まで進歩と改良を重ねてようやく

可能になる事柄についても、その実現の可否を断定することはできない。

コンドルセ氏が描く、人口が扶養手段を上回るときに起こり得る事態は妥当であり、人口が扶養手段を超えれば、彼の述べる変動が必ず生じ、困窮が周期的に起きる恒常的な要因となる。違いは、これを人類全体にいつ適用しうるかという見通しにある。氏は、それが適用されるのはごく遠い将来に限られると考える。これに対し、私が示した人口の自然増と食料の比率が事実に近いなら、その時期はとうの昔に到来しており、この必然的な変動、すなわち周期的な苦難の恒常的な原因は、記録の残る人類史の始まり以来、今日に至るまで続いている。しかも、人間の自然な性質に決定的な変化が起らないかぎり、今後も続くと見られる。

しかしコンドルセ氏は、たとえ自身が遠い将来とみなす時期が訪れても、人類全体も人間の完全化を唱える側も、怯えたり不安に駆られたりする必要はないと述べる。さらに氏は、この難点の解決について筆者には理解しがたい手法を採り、そのころには、迷信にもとづく愚かな偏見が、道徳の名のもとに人を貶める腐敗した厳格さを押しつけることはなくなっているはずだと前置きしたうえで、生殖や出生を抑える策として、離婚に近い形での同棲、あるいはそれに匹敵する不自然な別の手段を示唆する。だが、こう

した手段で難点を取り除こうとすれば、平等や人間の完全化を掲げる人々がめざす徳と礼節の純潔さを、結局は損なうと多くの人びとは判断する。